

## 大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進（1）

～ 児童生徒の自己肯定感を高めるために ～

石垣市教育委員会 教育長 石垣 安志



「世の中で一番大きなものは、何だと思えますか。」このように問われると私たちは、大きな建物や山や海、太陽などの大自然を思い浮かべると思えます。昭和の代表的な教育実践者である斎藤喜博氏は、「子どもは無限の可能性を持っている。自分をより豊かに成長させたいという大きな願いを持っている。」と述べています。私も、斎藤氏と同じように、児童生徒の捉えとして「児童生徒の願いやこれから成長する可能性こそが、世の中で一番大きなものである」と考えています。

では、肝心の子どもたちは、自分自身のことをどのように捉えているのでしょうか。内閣府による「我が国と諸外国の若者（13～29歳）の育成支援に関する調査(2018)」の結果では、「自分には長所がある」という質問に対し、「そう思う」と答えた若者は、アメリカ 59.1%、ドイツ 42.8%、イギリス 41.7%、フランス 39.5%、韓国 32.4%、日本 16.3%と日本が最も低い数値となっています。それ以外の質問結果も合わせて、内閣府は本調査の考察として、「日本の若者は、諸外国の若者と比べて、自分自身に満足していたり、自分に長所があると感じたり自己を肯定的に捉える者の割合が低い傾向にあり、日本の若者の自己肯定感の低さは、自分が役に立たないと感じる自己有用感の低さが関わっている。」とまとめています。

さて、本市の児童生徒の自己肯定感はどのようになっているのでしょうか。全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙（2019）では、「自分によいところがある」という問いに、「そう思う」と答えた児童生徒は、全国に比べて、小6（－10%）、中3（－11%）と大きな開きのある結果となっています。

自己肯定感とは、自分の可能性を信じたり、自分はできるんだという自信を持つなど、肯定的に自己を認識する感覚になります。自己肯定感の高い子どもは、自分に自信があるので、様々な物事に取組み意欲が高いことが特徴です。よって自己肯定感を高めることは、子どもの「やる気」を育てることでもあり、私たちが社会の中で幸せに生きていくための土台になる最も大切なものです。

この自己肯定感はどのように醸成されるのでしょうか。自己肯定感は、子どもの中でひとりでに育つものではありません。他者とのコミュニケーションを通じて、肯定されたり、承認されたりすることで、自分が自分であることの自信（自己肯定感）を獲得していきます。

ところが、保護者などの周りの大人から、自己肯定感を獲得する機会を与えられなかった子どもは、他者や社会とどのように関わればよいかわからず、承認を求めて周囲に過剰に同調したり、コミュニケーションに傷ついて心を閉ざしたり、トラブルになる行動をとったりすることもあります。自分を成長させたいと強く願っている子どもたちが、自分が成長できないようなストレスのある不幸な状態に置かれたとき、子どもたちは、劣等感を持ち、無気力になったり、反抗的になったりするようです。

長年、児童生徒に関わってきましたが、最近の子どもは、ちょっとした困難や嫌なことが起きると、それらを上手に乗り越えられずに、やる気を失い、すぐに挫折をしてしまうことが多いように見受けられます。本市の児童生徒の自己肯定感に関する調査結果からもこのことは否定できないと考えています。

そこで、石垣市教育委員会では、大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』と称し、児童生徒の自己肯定感を高める取り組みを今年度スタートさせました。児童生徒の自己肯定感を高めるには、学校教育だけでなく、保護者をはじめ子どもに関わるすべての大人が協力することが必要です。子どもたちが自信を持って成長しているかどうかを、周りの大人がしっかり再確認し勇気づけなければならないのです。

未来の社会を担うのは、子どもたちです。石垣市教育委員会では、「これから勇気づけの教育」について保護者・市民に向けて説明していきます。実践的な方法を紹介する中で、すべての親が悩む子育てについて共に考える機会にしていきますので、「勇気づけの教育」をご家庭でも推進していただきますようお願いいたします。

